

【寄稿】

「経営」の語源を訪ねる

〔改訂版〕

武蔵野大学教授
小 松 章

1 はじめに

「経済」という言葉が、「経国済民」（もしくは「経世済民」）という四字熟語に由来することはよく知られている。「経国」（経世）とは国（世）を治めるという意味であり、「済民」とは、民を済（すく）うという意味であるが、その「経国済民」（「経世済民」）から二文字を取って作られたと言われる。四文字を略して半分にするところなど、まさに「経済は節約なり」である。

では、「経営」という言葉はどこから来たのであろうか。じつは、漢和辞典の中には、「経国」の意味を「国を経営すること」と説明しているものがあることから知られるように、「経」の字には、すでに「治める」とか「営む」という意味が含まれていて、「経」と「営」は、同じ意味を持つ漢字として、古くから単独で、あるいは「経営」という二文字で、使われていたのである。しかも、その起源は、じつに紀元前の時代にまで遡るのである。

2 詩経「靈台」

手初めに、「経営」の語源に言及した先達の知恵を借りておこう。中国語学者の藤堂明保は、「経と営」の二文字について、次のように説明している。

「紀元前の八世紀、周の国の詩人は祖先文王が『靈台』という祭壇を築いて建国のシンボルとしたことを追想して、

靈台を経始し、これを経しこれを営す。

庶民これをおさめ、日ならずして成る。

と歌っている。土木工事や建築を始めるさい、まず経と営という作業を行ったのである。……

土木工事や建築にとりかかるさい……、まずクイを立てて、その間にピンと縄を張り渡し、削る所や掘る部分、支柱の位置などの予定をつける。その作業を経というのである。つまり、工事にかかる前の縄張りの作業である。……

工事の初めに、外枠に縄を張りめぐらしてクイを打ちこみ、全体の大きさ、規模を定める動作が営である。

経も営も、事業の当初に慎重に要所を定め、規模を予定する作業である。」

(藤堂明保『言葉の系譜』新潮社、1964年)

つまり、「経」も「営」も、本来は建築に関係する用語であるとされる。ちなみに、今日でも漢和辞典で「経営」の意味を引くと、第一に、「建物を造営すること」と説明しているものが多い。「経営」は、歴史的にまず建築用語として出発したことが示唆される。

とはいえ、「経と営」の二文字が詩経の「霊台」に見られるということであっても、そこでは、経営は、あくまでも「経之営之」（これを経しこれを営す）という形で登場するにすぎない。「経」と「営」は並行使用されているにすぎず、結合してはいない。経営学者としては、藤堂の説に満足しているわけには行かない。ズバリ「経営」という結合した二文字用語の歴史を探らなければならない。

3 詩経の再検討

そこで、あらためて中国の古典をひもといてみるならば、「経営」の文字は、じつは「霊台」のみならず『詩経』の他の詩においても、また『書経』においても使われていることが知られるのである。

詩経は、中国の紀元前 12 世紀頃から同 6 世紀初頭までの約 600 年間の、すなわち西周初期から東周の春秋時代にかけての約 600 年間の歌謡を収めた一大作品集である。春秋時代には孔子が現れており、詩経は孔子によって編纂されたとする説が有力視されている。つまり、それまで口伝に継承されてきた多くの歌謡を、孔子が整理して編集したというのである。逆に言えば、孔子が編集したから、詩経は春秋時代までの作品が対象になったというわけである。孔子は弟子たちに詩経の勉強を勧めており、その結果、詩経は儒教において重要な経典に位置付けられた。しかし、周が滅びると、秦の始皇帝による焚書坑儒のために、文献としての詩経は亡失した。そして、秦に続く漢の時代になって、毛亨（もうこう）が改めて伝承作品を編集しなおし、その毛亨の手になる詩経（「毛詩」）が、今日に残る詩経となっているのである。

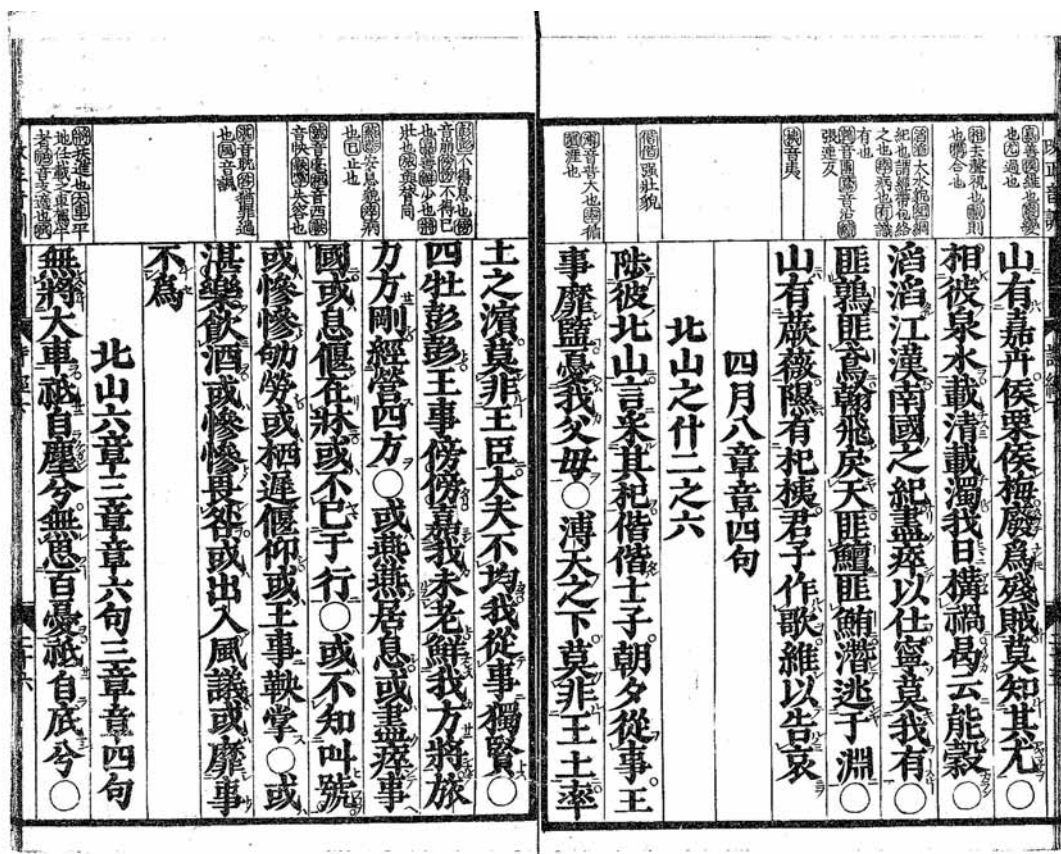
詩経の内容は、諸国の民謡を集めた「風（国風）」、宮廷の音楽である「雅」、宗

廟の祭祀の楽歌である「頌」の三部分から構成されている。ちなみに、「風雅」という美しい言葉があるが、これは詩経の「風」と「雅」が結合してできた言葉である。

宮廷音楽の詩である「雅」は、「小雅」と「大雅」の二部からなっているが、その小雅の中に「経営」という文字を含む詩が2編あり、大雅の中にも「経営」の文字を含む詩が1編見られる。ちなみに、「経営」の文字を含む大雅の詩が「靈台」なのである。なお、「風(国風)」の中には、「経営」の二文字を含む詩は確認されない。

まずは詩経の構成順に従って、「経営」の文字を含む詩を紹介しよう。小雅の2編の詩「北山」と「何草不黄」には、ずばり「経営」という用語が登場する。

(1) 詩経 小雅 ^{ほくさん} 北山



後藤芝山（世鈞）点『改正音訓五経. 詩経 下』山内松敬堂、明治6年。

（左ページ3行目に「経営」の2文字）

資料：国立国会図書館 近代デジタルライブラリー

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/753490/27>

【原文】

陟彼北山 言采其杞
偕偕士子 朝夕從事
王事靡盬 憂我父母
溥天之下 莫非王土
率土之濱 莫非王臣
大夫不均 我從事獨賢
四牡彭彭 王事傍傍
嘉我未老 鮮我方將
旅力方剛 經營四方

或燕燕居息 或盡瘁事國
或息偃在牀 或不已于行
或不知叫號 或慘慘劬勞
或栖遲偃仰 或王事鞅掌
或湛樂飲酒 或慘慘畏咎
或出入風議 或靡事不為

【日本風の読み】

彼の^か北山^{ほくさん}に^{のぼ}る
偕偕^{かいがい}たる^し士子^し
王事^{わす}盬^むこと^な靡^く
溥天^{ふてん}の^{もと}下^{もと}
率土^{そつど}の^{ひん}濱^もも
大夫^{たいふ} 均^{ひと}しから^ず
四牡^し 彭彭^{ほうほう}たり
我が^わ未^{いま}だ老^いざる^なを^よ嘉^し
旅力^{りよりよく} 方^{まさ}に^{ごう}剛^{ごう}にして

或^{ある}いは燕^{えん}燕^{えん}として^{きよ}居息^{そく}し
或^{ある}いは息^{そく}偃^{えん}として^{しやう}牀^あに^あ在^り
或^{ある}いは叫^{きやう}號^{ごう}を^し知ら^ず
或^{ある}いは栖^{せい}遲^ち偃^{えん}仰^{ぎやう}し
或^{ある}いは湛^{たん}樂^{らく}して^{しやう}酒^さを^し飲^み
或^{ある}いは出^{しゅつ}入^{にゅう}風^{ふう}議^ぎし

言^{こと}に^こ其^その杞^きを^と采^る
朝夕^{ちやうせき} 事^{こと}に^{したが}従^ふ
我^{わが}父母^{ふぼ}を^{うれ}憂^へし^む
王土^{わうど}に^{あら}非^{ざる}莫^し
王臣^{わうしん}に^{あら}非^{ざる}莫^し
我^{われ}のみ^{こと}事^じに^{したが}従^ひて^{ひとり}獨^り賢^いづく
王事^{わうじ} 傍傍^{ほうほう}たり
我^わが^{まさ}方^{さか}に^よ將^んなる^よを^よ鮮^す
四方^{しほう}を^{けい}營^{せい}せ^{しむ}

或^{ある}いは盡^{じん}瘁^{すい}して^{つか}國^{こく}に^{こと}事^へ
或^{ある}いは行^{こう}に^や已^まず
或^{ある}いは慘^{さん}慘^{さん}として^{くろ}劬^う勞^す
或^{ある}いは王事^{わうじ}に^{おう}鞅^{しやう}掌^す
或^{ある}いは慘^{さん}慘^{さん}として^{とが}咎^がを^お畏^る
或^{ある}いは事^{こと}として^な為^さざる^な靡^し

石川忠久著『詩経（中）』（新釈漢文大系第 111 巻 明治書院、1998 年）。387-388 ページ。ふりがなの一部は、現代仮名づかいに修正。

【通釈】

あの北方の山に登り、枸杞の葉を摘み取る。（それを捧げて山の神霊に申し上げる。）強くたくましい私は（群臣らと共に）、朝に晩に王命に従う。王の征役は休む（間も）なく（続き、故郷の）私の父母を憂えさせ（心配させ）る。

大いなる天の下、王の土地でないところはない。地の続く極みまでも、（そこに住む人は誰一人として）王の臣でない者はいない。（なのに王が）大夫（を使うのを）公平にせず、私だけが王命によって（多くの役を与えられ）独り苦勞をする。

四頭の牡馬は（休まず）力強く（馳せる、そのように）王命の征役は盛んに（起こる）。私がまだ老いていないことをよいこととし、私がまさにさかんなることをよいこととする。（私の）体力がまさに剛いので、四方の国々を經營させる。（なぜ私独りが王命により多くの役を与えられ苦勞するのか。）

或るものは（ゆっくりと）静かに休息して家でくつろぎ（ぶらぶらしているのに）、或るものは憔悴して国事に仕える。

或るものは休んで寝台にあおむきに寝て（いるのに）、或るものは（王事の用向きに）歩くことを止めず（忙しく動き回っている）。

或るものは（安楽に寝て、世の人の）悲痛の叫び声を聞かない（のに）、或るものはいたみ悲しんで骨折り苦しむ。

或るものはくつろぎ休み（気ままに）寝たり起きたりする（のに）、或るものは征役に忙しく苦勞する。

或るものは楽しみに耽って酒を飲み、或るものは痛み悲しみ罪を（受けないかと）畏れる。

或るものは（暇に任せて、朝廷に）出入りし（その場で）勝手気ままに（口先だけの）立派な議論をする（だけなのに）、或るものは何でもやらない仕事はなく苦勞する。

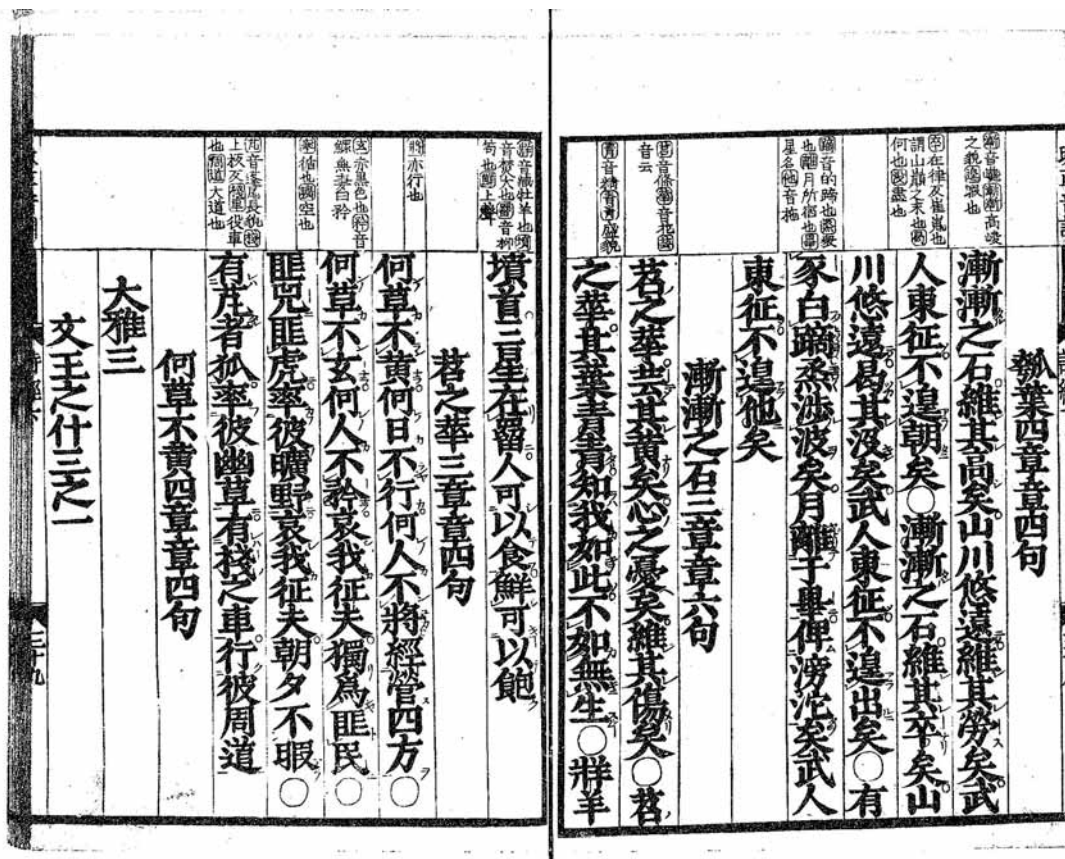
石川忠久著『詩経（中）』（新釈漢文大系第 111 巻 明治書院、1998 年）。388-389 ページ。（ ）は原文。

「北山」の詩は、大夫（小領主）が「幽王」を風刺した歌で、征役に人を使うことが公平でないため、自分ひとりが王事に苦勞して、父母に孝養を尽くすことができないことを嘆いたものである。幽王とは、「兵を用いて休まず、民を見ること禽獸

のごとし」といわれた周朝第 12 代の王（在位 前 781 年—前 771 年）で、愚行でも知られ、西周を滅亡させた王である。詩の前半では、作者の置かれた状況が述べられ、後半では安楽を貪る人々と王事に苦勞する自分とが対比されている。

前半の最後に「經營四方」という文字が登場する。前掲の通釈では、「四方の国々を經營させる」と訳されているが、注釈には、『經營』は、事業を営む意」とある。ちなみに、高田眞治『詩經 下』（漢詩大系 第二卷）では、「經營」を「經画營造する。はかりいとなむ。」と説明し、「四方經營」を「四方に使役して、事を計り営ましめる。」と訳している。「事業を営む」とは、今日いうところの經營（マネジメント）の意味にかなり近いと言ってよい。

(2) 詩經 小雅 か そう ふ こう 何草不黃



後藤芝山（世鈞）点『改正音訓五經. 詩經 下』山内松敬堂、明治 6 年。

（左ページ 3 行目に「經營」の 2 文字）

資料：国立国会図書館 近代デジタルライブラリー

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/753490/40>

【原文】

何草不黄 何日不行
何人不將 經營四方
何草不玄 何人不矜
哀我征夫 獨爲匪民
匪兕匪虎 率彼曠野
哀我征夫 朝夕不暇
有芄者狐 率彼幽草
有棧之車 行彼周道

【日本風の読み】

いづ 何れの草か黄ばまざらん	いづ 何れの日か行かざらん
いづ 何れの人か將かざらん	しほう けいえい 四方を經營せる
いづ 何れの草か玄ばまざらん	いづ 何れの人か矜まざらん
かな わ せいふ 哀し我が征夫	ひと あり 獨り民に匪ざると為す
か じ かのとら 匪の兕 匪の虎	か こうや かの 彼の曠野に率る
かな わ せいふ 哀し我が征夫	びょうせき いとま 朝夕するに暇あらず
ゆうほう 有芄たる狐	か ゆうそう かの 彼の幽草に率る
ゆうきん 有棧たる車	か しゅうどう ゆく 彼の周道を行く

石川忠久著『詩経（下）』（新釈漢文大系第 112 巻 明治書院、2000 年）。51-52 ページ。ふりがなの一部は、現代仮名づかいに修正。

【通釈】

どんな草が黄ばんで枯れないだろう。いつになったら行かないですむのだろう。
いったい誰が行かずにすむのだろう。いったいだれが諸国を治めるのだろう。
どんな草が黒ずんで枯れないだろう。いったい誰が病にならないのだろう。
哀しいかな我が征夫、ひとり人とも扱われず。
あの野牛あの虎、あの広大な野に追い立てる。
哀しいかな我が征夫、宗廟にいそしむ暇とてない。
フサフサとした狐、あの深い草原に追い立てる。
高々とした車、あの大道を行く。

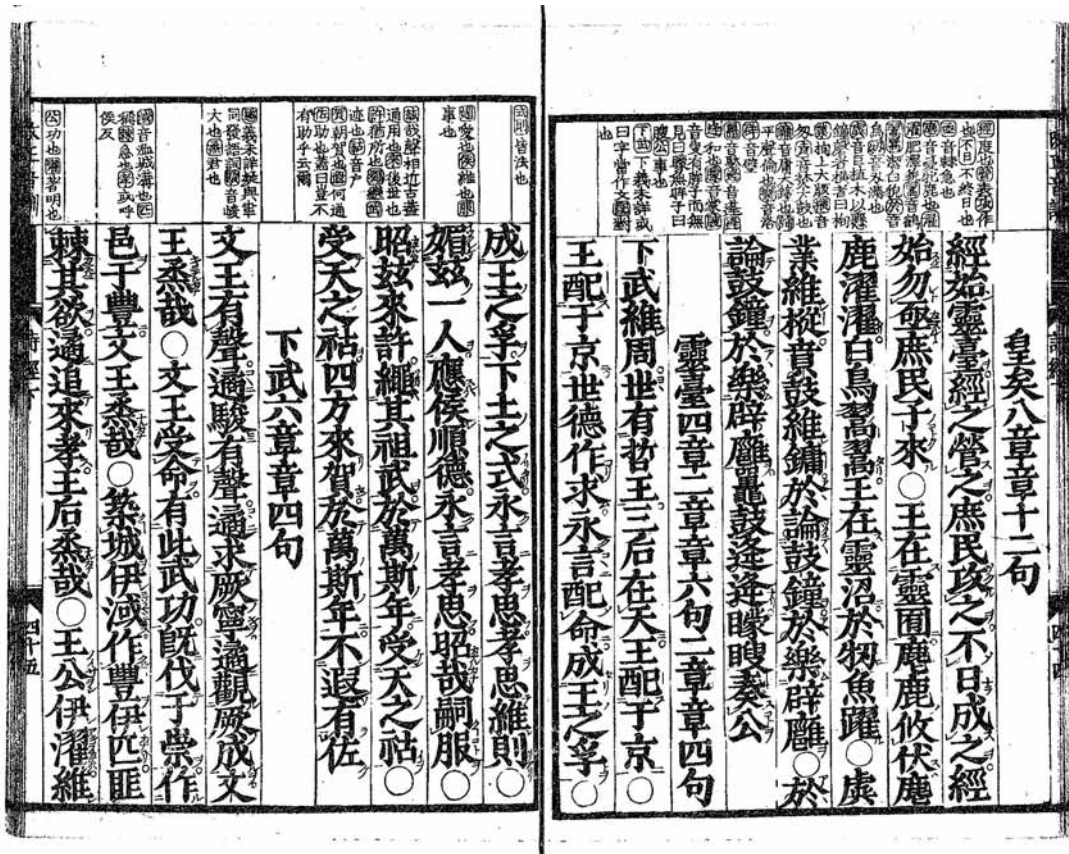
石川忠久著『詩経（下）』（新釈漢文大系第 112 巻 明治書院、2000 年）。52 ページ。

「何草不黄」も、幽王を風刺した歌である。征夫が家族を離れて一人異境にある心寂しさを歌ったという解釈（白川静）もあれば、征夫を送り出した妻の立場から歌われたものという解釈（赤塚忠）もある。石川忠久の書物では、征夫を送り出した家族（婦人に限定はできない）の立場からの歌とする。

詩の2行目に、「経営四方」の文字が登場する。「何人経営四方」の「何人」が省略された形であるとされ、前掲の通釈では、「だれが諸国を治めるのだろう。」と訳されている。この「経営」については、注釈で「治める。行役の目的は、防衛的な施設の工事などを主とした」という白川静の解釈が紹介されている。要するに、防衛施設の工事などのために辺境に送られた征夫自身の歌、もしくは征夫を思う家族の歌ということになるが、誰が諸国を治めるのだろうか、治める人は誰もいない、という意味内容から、この「経営」は統治の意味に等しく、今日の経営（マネジメント）の意味にきわめて近いと言える。

次に、大雅の詩「文王之什 靈台」を紹介しよう。ここでは、前掲の藤堂明保の引用にも明らかのように、「経営」の二文字が、「経之営之」という形で登場する。

(3) 詩經 大雅 文王之什 靈台



後藤芝山（世鈞）点『改正音訓五経. 詩経 下』山内松敬堂、明治6年。

（右ページ2行目に「經之營之」の4文字）

資料：国立国会図書館 近代デジタルライブラリー

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/753490/46>

【原文】

經始靈臺 經之營之
庶民攻之 不日成之
經始勿亟 庶民子來
王在靈囿 麀鹿攸伏
麀鹿濯濯 白鳥嚶嚶
王在靈沼 於物魚躍
虞業維樅 賁鼓維鏞
於論鼓鐘 於樂辟廱
於論鼓鐘 於樂辟廱
鼉鼓逢逢 朦瞍奏公

【日本風の読み】

靈臺 <small>れいだい</small> を經始 <small>けいし</small> し	之 <small>これ</small> を經 <small>はか</small> り之 <small>これ</small> を營 <small>つく</small> る
庶民 <small>しよみん</small> 之 <small>これ</small> を攻 <small>つく</small> る	日ならずして之 <small>これ</small> を成 <small>な</small> す
經始 <small>けいし</small> するに亟 <small>いそ</small> がしむるに勿 <small>あら</small> ざるも 庶民 <small>しよみん</small> 子 <small>あつま</small> り來 <small>き</small> たる	
王 <small>わう</small> 靈囿 <small>れいゆう</small> に在 <small>あ</small> れば	麀鹿 <small>ゆうろく</small> 攸 <small>こ</small> に伏 <small>ふ</small> す
麀鹿 <small>ゆうろく</small> 濯濯 <small>たくたく</small> たり	白鳥 <small>はくちよう</small> 嚶嚶 <small>かくかく</small> たり
王 <small>わう</small> 靈沼 <small>れいしやう</small> に在 <small>あ</small> れば	於 <small>あ</small> 物 <small>み</small> ちて魚 <small>うお</small> 躍 <small>ど</small> る
虞業 <small>きよぎやう</small> と樅 <small>しやう</small>	賁鼓 <small>ふんこ</small> と鏞 <small>よう</small>
於 <small>あ</small> 鼓鐘 <small>こしやう</small> を論 <small>つら</small> ね	於 <small>あ</small> 辟廱 <small>へきやう</small> に樂 <small>がく</small> す
於 <small>あ</small> 鼓鐘 <small>こしやう</small> を論 <small>つら</small> ね	於 <small>あ</small> 辟廱 <small>へきやう</small> に樂 <small>がく</small> す
鼉鼓 <small>たこ</small> 逢逢 <small>ほうほう</small> たり	朦瞍 <small>もうそう</small> 公 <small>こう</small> に奏 <small>そう</small> す

石川忠久著『詩経（下）』（新釈漢文大系第112巻 明治書院、2000年）。111-112ページ。ふりがなの一部は、現代仮名づかいに修正。

【通釈】

靈台を創建し、これを測って造営します。

人民がこれを作り、幾日もかからず完成させました。
創建するのを急がせたわけでもないのに、人民が群がりやって来て完成させたので
す。

神霊が靈囿^{れいゆう}にいませば、神の使いの牝鹿もひれ伏します。

牝鹿はピョンピョン飛び跳ね、白鳥もいよいよ白く。

神霊が靈沼にいませば、水面に魚が満ちて飛び跳ねる。

楽器かけの縦柱に 横板飾りに 楽器かけの飾り、大太鼓に鑄鐘。

ああ鼓鐘を並べ、聖地辟廱に奏でます。

ああ鼓鐘を並べ、聖地辟廱に奏でます。

鼙鼓はボンボン、楽人が辟廱に奏でます。

石川忠久著『詩経（下）』（新釈漢文大系第 112 巻 明治書院、2000 年）。112 ページ。

「文王之什 靈台」の詩は、周の時代に、王朝の始祖である亡き文王の徳を讃えて作られた音楽詩である。「文王」は、殷（いん）王朝に対峙して周の勢力を実質的に確立した人物で、仁政をもって知られ、没後、子の武王が殷を倒して、周王朝を正式に築いた。なお、「靈台」とは、神霊が降りる土の壇を意味する。

詩の冒頭に「經之營之」という文字が登場する。石川忠久の書物では、日本風の読みとして「これを経（はか）り、これを營（つく）る」と読ませているが、前述の藤堂や高田眞治（『詩経 下』前掲）は、「これを経（けい）し、これを營（えい）す」と、そのまま音読させている。

意味については、石川の書物の注釈に、「『経』は、毛伝に『経は、これを度（はか）るなり』とある如く、測量する意。『營』は、屈万里が『營は作なり』といい、白川静が『宮室を造営することを營といい』（字統）という如く、作る・造営する意」と説明されている（112 - 113 ページ）。つまり、測量して造営するという意味であり、まさに靈台を、測量して造営したのである。ここでの「経」と「營」は、建築上の意味をもった言葉（文字）として使われている。

さて、以上に見たように、詩経には、経営の文字を含む詩が 3 編見られる。ここでは、詩経の構成に従って、「小雅」→「大雅」という順で紹介してきたが、詩経は、600 年の幅を持つ多くの詩が、内容に従ってジャンル別に編集されているため、創作された古い順に並んでいるわけではない。では、紹介した三作品のうち最も古いものはどれなのか。大雅の「文王之什 靈台」は、周の時代になって王朝の始祖である文王をたたえた歌であり、一方、小雅の二作品は、西周最後の第 12 代「幽王」を風刺した歌であり、周国が衰退していく局面で読まれているところから、小雅の

2編の詩は、「靈台」よりも新しいことがわかる。このため、経営の文字が見られる最も古い詩は、「靈台」であるということになる。藤堂明保が経営という言葉の由来を「靈台」の「経之営之」に求めたのも、そのゆえであろう。

しかし、「靈台」においては、経営の文字は、形式としてみれば「経」と「営」が未結合の状態で使用されており、意味としても建築上の用語として使用されている。これに対して、「北山」と「何草不黄」においては、「経」と「営」が結合して、まさに「経営」という二文字用語として、しかも今日的な意味であるマネジメントに近い意味内容において使用されている。それゆえ、「語源」という言い方はできないものの、形式的にも意味的にも、経営という言葉が使われた最古の事例ということになれば、「北山」と「何草不黄」に見られる経営の二文字をあげて問題はないであろう。

なお、余談になるが、経営の文字を含む詩経の3編の詩が、その内容において二人の王のリーダーシップを対照的に描き出していることは、きわめて興味深い。始祖「文王」が、人民から慕われ、急がせたわけでもないのに人民が王のためならと靈台をたちまちのうちに完成させたのに対して、第12代「幽王」は、臣である大夫（「北山」）や征夫（「何草不黄」）から、人使いの荒さにすっかり愛想を尽かされている。「他者を自分に引きつけるのがリーダーシップ。自分を他者に押しつけるのは、権力」という経営学のスタンダード・テキストの簡潔な定義に従うならば、文王はまさに良きリーダーであり、幽王は権力者そのものであったといえよう。経営の文字を含む3編の詩は、内容それ自体も、経営学にとって、じつに教訓的であるといえる。

4 書経に見る

経営の文字が『詩経』に見られるとすれば、時代が重なる記録集であり、詩経と並んで儒教の重要な経典とされた『書経』の中にも見られるはずである。そこで、念のため書経についても見ておくならば、果たして「周書^{しゅうこう} 召誥」の中に、結合した「経営」の二文字が確認される。

書経は、もともと『書』あるいは『尚書』と呼ばれた。「書」とは記録のことであり、虞書、夏書、商書、周書の四部に分かれているが、周書は、周王朝の史官の記録したものと考えられており、記された内容について事実としての信憑性が最も高いとされる。「その主要な部分は、周王が同族の子弟を諸国に領主として封建するに際して、領主としての政治上の心構えを訓戒した詔書類あるいは戦いに臨んでの檄などである。」（加藤常賢『書経 上』新釈漢文大系 第25巻、明治書院、1983年。解説）。

その周書の中の「召誥^{しゅうこう}」に、経営の文字が見られる。



『校正改点 片仮名付 書経 地』一貫堂。

(右ページ最後の行に「經營」の2文字)

資料：国立国会図書館 近代デジタルライブラリー

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/753549/27>

【原文】

召誥

惟二月既望、越六日乙未、王朝步自周、則至于豊。惟太保先周公相宅。越若來三月、惟丙午朏、越三日戊申、太保朝至于洛卜宅。厥既得卜則經營。越三日庚戌、太保乃以庶殷、攻位于洛汭。越五日甲寅、位成。〔以下省略〕

【日本風の読み】

惟れ二月既望、越に六日乙未、王朝に周より歩して、則ち豊に至る。惟れ太保 周公に先んじて宅を相る。越に若いて來たる三月、惟れ丙午朏。越に三日戊申、太保朝に洛に至り宅を卜す。厥れ既に卜を得て則ち經營す。越に三日庚戌、太保乃ち庶殷を以いて、位を洛汭に攻む。越に五日甲寅、位成る。

橋本循・尾崎雄二郎他役『詩経国風 書経』（世界古典文学全集 第2巻）筑摩書房、1969年。386ページ。

【通釈】

二月の既望いざよいの日から六日目の乙未きのとひつじの日に、成王は朝、周都、鎬京こうけいから歩いて豊〔文王、武王の宗廟の所在地〕まで行かれた。太保の召公は、周公よりも先に場所を調べに出かけていた。ついで三月は、丙午ひのえうまの日が朏みかづきであったが、その日から三日目の戊申つちのえさるの日に、太保は朝洛邑らくゆうに着き、場所をうらなった。そこでうらないが吉とでたので、企画測量をした。その日から三日目の庚戌かのえいぬの日、太保はもとの殷のものを指揮して洛水の北に都の位置を見積りし、それから五日目の甲寅きのえとらの日に、その位置が決定された。

橋本循・尾崎雄二郎他役『詩経国風 書経』（世界古典文学全集 第2巻）筑摩書房、1969年。387ページ。〔 〕は、小松補足。

このように、書経にも「経営」の二文字が確認される。ただし、その意味は、通釈から知られるように「企画測量する」という建築上の用語として使われている。

この文章に登場する王こと「成王」は、周王朝の第3代の王である。成王が都を洛邑に移すに当たり、摂政の召公が先に行って土地を占い、吉と出たので企画測量をしたという記録である。

ちなみに、タイトルの「召誥」とは、成王に対する召公の戒めという意味である。内容から推察して、この文章は、詩経の「北山」や「何草不黄」よりかなり古い可能性が高い。しかし、（あるいは、古いがゆえに、というべきか）ここで使われている「経営」の意味は、あくまでも「企画測量する」という建築用語であり、「靈台」において使われた「経と営」の意味をそのまま引き継いでいる。「経」と「営」が結合している点では、二文字の形式を満たしてはいるが、意味的にはまだ建築用語を脱していない。まさに、「靈台」における「経と営」と、「北山」「何草不黄」における「経営」との中間段階に位置する「経営」の使われ方である。それゆえ、「形式的にも意味的にも、経営という言葉が使われた最古の事例ということになれば、『北山』と『何草不黄』に見られる経営の二文字をあげて問題はないであろう」という前述の結論はくつがえらない。

5 日本の古典

中国の『詩経』や『書経』から時と場所を隔てて、日本の古典の中にも「経営」という文字が現れる。

旺文社『全訳古語辞典』によると、「経営」には、次の三つの意味があった。

- 1 建物を造ること。構築。
- 2 物事を計画したり、執り行ったりすること。事業を行うこと。運営。
- 3 「けいめい」とも。物事の準備に奔走すること。特に、接待に忙しく走り回ること。

同辞典によると、1の「建物を造ること。構築。」の意味に使われる「経営」の例が、『平家物語』（七・聖主臨幸）に見られる。

「多日（たじつ）の経営をむなしうして、片時（へんし）の灰燼となりはてぬ」

現代語に訳すと、「（平家一門の家々は）多くの日数をかけての建造も無駄になって、あっという間にすっかり灰や燃えがらとなってしまった」となる。

2の「物事を計画したり、執り行ったりすること。事業を行うこと。運営。」という意味は、今日の経営の意味に近い。というよりほぼ同じであるといってもよいであろう。同辞典によると、この意味で使われた例が、『太平記』二七に見られる。

「御即位の大礼は四海の経営にて」

現代語に訳すと「ご即位の儀式は天下の大事業であって」という意味になる。

3の「けいめい」についても見ておこう。「けいめい」は漢字で「経営」と書く。同辞典によると、この意味で使われる例は、『今昔物語』二七・一七に見られる。

「房主（ぼうず）の僧、『思ひかけず』と言ひて、けいめいす」

現代語に訳すと、「僧坊の主である僧は、（お出（い）では）『思いがけない』と言って、接待に奔走する」となる。

参考までに、学研『全訳古語辞典』も、「経営」の意味として、実質的に上記と同じ三つの意味をあげているが、3の「けいめい」が使われている例として、『源氏物語』（夕霧）を紹介している。

「大殿も、けいめいし給（たま）ひて、日々に渡り給ひつつ」

現代語に訳すと、「(左大臣の) 大殿も、(源氏の) 世話に忙しく立ち働きなさって、毎日、(二条院に) おこしになっては。」となる。

また、三省堂『全訳読解古語辞典 第二版小型版』は、第1に「建物を造営すること」をあげ、第2に「けいめい」とも、として「精を出して励むこと」と説明している。そして、後者の事例として、『とはずがたり』をあげている。

「乳母たち、経営して養ひ君もてなす」

現代語に訳すと、「付き人たちが(あれこれ) 準備して、養ひ君のお世話をする」となる。

6 建築用語からの脱皮

このように、日本では、経営という言葉は、そこに三通りの意味と二通りの発音を内包して、古くから使われていたことがわかる。また、経営の三つの意味内容に踏み込んで見るならば、「物事を計画したり、執り行ったりすること。事業を行うこと。運営。」という意味の「経営」と、「物事の準備に奔走すること。特に、接待に忙しく走り回ること。」という意味の「経営」(けいめい) は、「建築」の分野とは関係がない。しかも、古語辞典に例示された古典の時代関係からして、経営の三つの意味は、特定の時代に特定の意味だけが限定して使われたという時代別の関係にあるわけでは決してなく、むしろ同時代において、建築用語として使われる一方で、他方において「建築」とは別のことがらを意味する用語として、多義的に使われていたと考えられる。

ちなみに、中近世になると、建築の分野では、「経営」に代わって、「造営」という用語の方が一般化していく。鎌倉幕府と室町幕府においては、寺社の建築・普請を司る臨時の官職として、「造営奉行」が置かれた。江戸時代における寺社の建築・普請には記録が多く残されているが、そこで使われている用語は、もっぱら「造営」である。たとえば徳川家光による日光東照宮の造り替えの際には、造り替えの総奉行である秋元但馬守が収支報告書に当たる『日光山東照大権現様御造営御目録』(通称『御造営帳』)を幕府に提出している(日光観光協会ホームページ、<http://www.nikko-jp.org/perfect/toshogu/index.html> 2013年3月24日アクセス)。天正6年(1678年)の諏訪大社の上社本殿の建築に関しては、『上諏訪御造営帳』という資料が残されている(今井広亀『高島城』諏訪市教育委員会、1970年)。

つまり、逆にいうと、経営という言葉から建築固有の意味が消え去ってしまい、経営は建築用語から脱皮するのである。

このように、歴史を振り返ると、「経営」という言葉は、日本でも、きわめて古くから使用されていたことが知られる。「経済」がどちらかといえば専門的な分野で使われてきた用語であるのに対して、「経営」は、古来、人々の日常生活に根ざした漢字由来の一般的な言葉であったのである。

本稿は、『経営問題』（日本学術振興会経営問題第108委員会機関誌）第5号（2013年4月刊）に掲載した拙稿に、一部改訂（訂正）を加えたものです。ページ送り等の変更はありません。
（2013年4月24日）